報恩集

十三条

中村俊定文庫
文庫 18
734

かのしゝ完まいやしくは詞藻の
なきをけみするものゝ手
やまむしをふりよめる志すゐと
ことの妹は箭をとめて枝を
西に葉に肉の縫りぬる
いと梅あるものあてしける徒
強き磨ゝるを見すゝめ心に

藏書 多都味
淸川

然ハ蕉翁のしめされし教篇毎にハ
梓にのせて学ふ子の初学者を
惜むなとなしけることこそハ後世の
為ともなりて雛形の一筋
みちと思ひて序す

四世雪中菴
完来

早稲田大學圖書

俳諧十三條序

凡、此頃ハ集編の事難きに似て編との
かくふるきよりも編者の頭におふかす其ハ師を
以て中に於て秘書も師をゆるされんハ乃
寄特の中にも思の母なりやうやくにして道に
真菓を結ひ筆かしく常に花をおもひもなく
硯の海深き川のなかしそめつゝ真如の
月をうつすあらしふきかくしき冊を師と

中村俊定文庫

えらひて位の一つに事をあめりける仙台山の
高きに集まる竜か淵の深きに汲めるとのことく
志る人俳諧世志りしきれんや俳に古人今人と
いつれも雲を起し風を御して前後くしめくく
此の絶位にまさるへし我師三世雪中菴蓼太居士
二世吏登翁の命をうけ雪門の棟梁たるより
ひさしく師恩の重きを荷ひしより終につらぬき
常にをとして関に徳をまなし はかりを

ふてる伊勢にめくりつゝ三越路にかゝりて花洛の
あけぼのの難波の春の須磨や播磨や東海道の
往還も二十年を閲して笠の雪を落すの間に
甲斐に猶あそひ信濃に麻衣をかへし大徳や
老師生産の地なれは門人の志りにはかりて仮にも
いつれか処に塚を築き石碑を建嵐雪吏登三師の
句を残せるも丈より出羽よりけ人象潟阿古屋に
さ海よりひとつ此程くや松嶋高館に備ふ白河の

並誹諧の事も二編あまりしかくまで此梢に遊し
風をよびいれて閑に深くすみかの露あはれとし
志うのこころ寸心紀南紀四国燈籠の人々も書綴
よも侍るを住て遊嚢のまろん事をとこひ乃奈会せ
されば何も知て閑居か文不つゝ侍るつる筆硯居る
きくまでも須川かられる駿河のよ八滋ある路
ちりぬ詠もおもしく宗祇法師の畑りをけ(?)る
世中のふるはぬにもさらにしぐれとて處を時雨忠こ

名ばかり遠江に七竈庵ハ孫子の徘徊する
よるまあまりひとつ此あたりも志つくし奥なる五嶋樓外
嘉定庵ハ従嬬せし中のおもかげ忘れられぬあと
名まして閑か唐か八十氏川も紛ぬ他の出さき入
まも此辺の枝折とて手しらぬあとにかしこの村田家
大唐窟ハ在語し此よし甲の清泉もおもひこされよ
比外常にいつもちくに東観天台山の小根岸の里宗八
止観に書を偏にこる暁 一句字此月あきらかなる

老を養ふたよりとて老学巣を結ひ浅草の渡に住
稲荷堀なる子規亭といへるにたて機雨楼を北
人にも命せしむされは其地を号け門人志ある
かきりはそれぞれのほかに行脚の杖外に出る常に
文墨を専らとし誰の道によりて杖をひける
寓居なくし又古池の草庵を起し中にも
集を撰て草五十余部芭蕉翁句解経籍の
書集あり芭蕉翁紙に記ためたる杜征南顔秘書に

志を継で續其袋は先師嵐雪居士五十回忌に
追福として櫻塚を再興し人左葛才（今号周竹）を
判者として本然清浄の光をかゝく蕉翁
七十周忌にも深川要津禅寺に侍塚雪碑を
供養し吐月信夫（乙酉冬物故）阿音を判者として
三万句思ひ切のおこなひなる緇素堂の墨事五百
有余人あり又追善の句を集る事三万余千
年余章なり是ある風しい芭蕉翁俳塚とる

集ならびに芭蕉翁真蹟集三翁来書記を校合
し無門関の付俳諧罪八則を頭す又霊めかし
いつる小編あるは見る仕月窓の夜話して童蒙の
惑を解んとするは只聞んとおもふ耳近くなんなく
園やはらかんかためにあらくしおもと葉此よしに
青きをせしを土の中よりいづる色の光得かたく
石の中より玉の路あらはるごとくいつしか世にしれ
ころ人もとてもやすきなきと為れるいさゝか師命に

たよりあれくさは流て外人に及びつゝもの多き
なりしを慚もつゝかやうなる私しある門人や
志を合せて白滝百韻唐詩三物墨譜合の如く
よりし前後の外三斛前後の夏引よ附会を序し
花筆翁よりも正花をわたし飛鶯八層夜二三奇仙の
曲節よりあそぶ芭蕉翁文集芭蕉翁附合集芭蕉翁
文臺図芭蕉翁の紀行春と秋去来湖東問答雪然
はむ等此冊子に水を首亭ゆいかりをあつめりし

蜀川夜話五器一具草訣伝書ハ周竹の行脚の
風流を残せり百ゐしく毎梅の痩老耳集ハ詠集
霞男ハ後遠の枝葉をあつめまして芝蓉文集ハ
新古此葉藻を撰ハ辛評ニ分つハ漣の風行を
はらし仏の篇つくし行脚ハ要石の不易を興讃義
遺稿ハ友をしのふ今ある昔を光を嘆す曲水
公平羽帚ハ園秀やすを助く十牛圖瓜の蔓
天狗問答捌捜の四集ハ酸も甘も其人を知るに

去つしらの續部問答百五十番句合柳里紀たえ屋を
さへ此外をおしく挙るに及ず又蕉翁嵐雪師とより
傳来の秘書十條ありまかしよ氷のもしくんを
考訂して家の至寶となし更ニ魚目魚鬼のあやふき
おしむ志ありとく道をすてやさゝらんとるあれ
志を同しる洲ありて門葉院二千余家をあおしく
雅象乙見とはしめ嵐亭人左周竹白牛雷堂吐月
阿音六窗等各判者の列をつらね盤古ゟを初も

其席を汚せりといへども内典の道の迦葉に唐土
外教の徳行孔子に起れる兄ことくにして新たに
ひとりなるなし伊賀師の齢を顧るに五十余り給へり
長き夜ふかる旅を行脚門に遊ぶ也年の春秋に
雪月花古道光をかくし葦なる風をおもかげに此
無くなる時亡師の生命に到てぬ殊なり
鳴呼吏登翁涅滅度時の後次ぐ雪林継して其
かくして大祥忌に八一日一口の摺絵の奇作を古都に編あり

草露にかける稲妻也、新清やれく大祥忌に八
亡師白系の地なれを深川浄心寺に石碑を造立し
白牛を判者として一万句の法会を行ふ時雨の市定
また星霜押しつり休廣忌にあまる亡師の遺稿七部捜を
えらひ雷堂を判者として一万句の法筵をとく
死出の田をおも声をとのやうにし見し一夜の宴
数つもりて去し水無月二十五日は説き遠方十三回忌に
及ぶるをりに俳諧十三條の撰ありて移中三條也

いつれの老師遺書十四條あり其内一條ハゆゑに
秘しおかれしはなはだ見を省て余ハ十三條をもて
首巻ゆゑにあらはし次く上の巻となし又歌仙十
三巻ハ當時門下につらなれる貴公子をはしめ
さらに懐舊の句々に追加して追悼
中の巻となし又発句十三部ハ山崔の帰るに
紫陽花の開く新酒のともしく錦綉の世しき
まもる三圍の神風に浴し御堂の佛前にかけ

ちよ柏の盃に對し光をしたふひとゝへにあるも
祝し袖の浦によりて執をしたひ待乳山のこなたに
浴に枕して故園の夢を彼岸に鏡を遮して身を
懐をかこち化野の烟にむせひ雪の夜のあはれまて
汀の芦かれかれに見を下の巻とし合て三巻と
なしてかくて其日ハ深川要津寺に会する拝く
誦経施濟のまうけをうなかし導師はつ寺の
道をあつめ尽くせる丈蕉翁ならひに嵐雪あらし

嵐雪なかりせば吏登あらじ吏登なかりせば蓼太
あらじ蓼太なかりせば何ぞ斯の法筵の盛なる事あらんや
紫雲たなびき龍宮をあらし音楽を聞て降臨をまつ
俳家にあつまりて頌経し諸佛仏陀梵天天
衆をはじめ菩薩羽人まで三世比法師達衆皆是
此集中に歓喜踊躍し諸人ともに賞翫するや
其流を汲て轉法輪の周旋歳月をかさねなりしことぞ
まさに寶の園の寶利もなく流の浅くしまる

水堂にすゝむる事年々なれば追悼の此序
まつなりし吏登をうけたまはり三十三回忌に隣と
いへども更其功あらはれ見るに耳に目に聞に涙
師道の奥く小盛なるかれもむかしを挙て心字九面の一炷と共に
吏登堂蓼壺に告まゐらすのみとなり　時明和四年丁亥夏
六月二十有五日盤古謹序

序

桜井楚水謹述

夫俳諧は小技なりといへとも今是を和する此一藝に
して是をなすにいまた其門を奥とし翫とし
とりて此に一様に見えてみな羅をなしを
関との盛にて定まる處に吏登弥光樹とすゝめしより
其の山路によるあはれ雪おさくとまゑ秋の泛舎に
飛ひ来る此頭とめかて今是十あまり三ヶ所の
己庭を送りより月くもて雪中庵を追悼の宿とて

小集をはじめ句集に十三傳といふ其角か雨窓
是を乃せず宗又何といへん達とそれに中に
秘書ありと何に加へし並れ是や浦をりと
通て益あらんと枯謂へるめされとも九級の貴れ
功に徐んとてまるあらんと沖の中ことかさなりける
いなこのいをかくしてき川のいさゝか文は世に旨を述る
事とらすかれとも此秘書を繼組並蕉翁より崇
嵐雪に賜ふ之吏登に傳ふ之今貞ちた是を換るもの也

蕉門一流の準とするに苟も是よりもいづかへ此
七とらん此教に宮師雪中二ち河源をよ窺ん之祝の
海に漁して網にすゝむる魚を拾ひ捨の玉藻を集てハ
是を沈む事とし是を絶句とし相調類を上げる
總て十四巻とすゝめ取謂

桜戸　木枯芽　花のしく　春日 二巻　三の乱
百千鳥　ふゆる　雪川法　三し四
雪花は　運る　鶴　離　葛藤抄

見ることの事にたゞわかるとわりてあはれなるへき
のこかくいつとして我となるはいかにあそひまふめつれと
いまたかの代城は至り何も我と見すてゝ発六孟貴
烏蕘か席を帰女の鮮に剖りて毛嫱西施か行を
贅者の前に拭ふことしかれ我をまつてさる残りて
愛を僧をなす古人謂ことく何ぞ画をなす人相を
画とも其胴を画事あることはふ是を画とするに声を
画事何とぞ是有りといふとも敎とし而かなるもの

風に致りて真精神を尽し是何ぞ幽玄微妙ならむ
城に至りしもむやみにうちのいく雪中庵蓼太
納て後の弟子を得んと寸鳴呼比昔や河童乃
ごとく山猫のごとくなるまで尽しめ事を新にて
そくかれ此堂も天の代の吾人まだ是をかくいふ事を

吏登翁遺稿

雪中菴蓼太編集

連の条

吏登云はく一條も附句二句の間に好悪を残さすして
いつ本なるは筆連の意をおもはせて数くにしも気あるは
条のつゝきあるかことく附合も発句より揚句まて
一ト続のたゝしきを以て俳諧の連歌といふとそ

古人の附句は是を禅家の問答商量に似
たりとなんいへり僧問趙州萬法帰一一帰何處
州云我在青州作一領布衫重七斤萬法此
帰一之二字を問たる前句なり此趣に對して
帰する所の理屈を離れ世智弁をはなれて風雅の
風上より思ひ又重さ七斤のこゝろへたる餘情
あるにていふもおかし後よりこゝろへたるへき
おもひ見る風雅の主人ならもいふなりけるよ

きれうしの塩梅をいふ

塩うき魚よるまをみて出し入
ふかれ香の支こゝろさめぬならし
宵さくたくれ　次　八日
ひとりれきをおとれ軍の大勢なり
章庸を去りしく語てからやあら
命かけしに　撰集の沙汰
蓮のいとれ連綿たる事限なくうく寸

三尺の葛藤

誉は付一條も發句附句ごとに常摘をなる
あらされとも無りたる三尺此あやめる水をそくさうされ
世ゝにあとある糟の附句合せの情をうちまたく
いたりともうしくつれハ彼誹諧を好るる宗匠
人の口上下まして有司の耳にうてぬまゝ似るあかされハこそ
上にまかるを句作をすとせ残菊行卿の法
俳諧の誉乃子を心をのそくらわたむいと滴

あこうも泣おの耳にハ附きやらて暁に起さし出し
息もつかぬあへ貌膝をはにふくあるさゆ図し
の情むあそれあしとふても句にいひとる宋祖しと
捨ゝ汎り其角は甲を別みて一ら僕令に
猫をきて枕さしあかる
こいふ前句の心しらて
誉此子あまして船に乳を呑
かく附なしたるも三才図会の絵をつくられまて

さらに句にまとれとらつゞきさびを翁もあらわ
梅を遠へるとも、其角かおよそさま示そも
はふきる人ぞあるべし

夜の柱

登云は際をたよくて序なる事ありて夜にも
起もかゝる時に灯りちかて雨も来もとくとも
昼よくて並し柱にもつゞきて兼題を立るかとし
然れば其かこなれこへ発句を立る事肝要ふとそ

発句も元にねるし然らしも梅の句は桜りし
詠ざ桜の発は桃も海棠もこゝろ也世をよばる
あらとされは是彼柱を立んとも草木の獣の時の
姿を常に心にかけよと言ひ発句のこゝろもふく也と
いふに猶読ありある山嵐雪の門に入て発句は後の
折りに被詠くとこ也の境を観を引古句を以て
示されけれとも此人猶学なれと何也とこのまゝに
其席に氷花ありきるが元生のまゝ論いよしと

いへとも中く当云の身にて落中海しそれかし
かゝわる鬼のうこし動のを見じて雷電の強く
王土にまめる性おるを勅使三度に及をせハ
いかての気国よさしらん其時丞相姿を強かりか
鬼のあし折ふしかけ此お前をに松梢をとる句を並
くるをお川とく嵯峨帝を妻戸ふきりとをおりけ越
く松梢をちまち火焔とあて扉ふきりとをとく
あるけ時の菓子饅頭羊羹あるを瓦持のたくはまも

中く火炎とをおすさる海の知あとうしく
見鬼のくとを抜をとして彼人合点して
登り上まーしをとて又附句

鳴るおよ綿し竹の節を数

こつふ前句のおもろしれはなの文字なよ人は鳴るにまや
候ん数にや候んこれよしつゝしよるをまるく
彼般をおうる人はとも待まさるりあかれそく

遊人に連をて妹か身を隠て

かく詠じて数ハ時々も由来伝ふハ八字也
作なる事ハ嵐山よこむすび文字なり
さへなまり根こそも誹とも
此八の文字ある句ありハ大かたをつくし
是夜の種なりと口伝

淀川

登云此流を淀川の名のよハ事しと流く
かきおりいと続しつまきの如くいかにもそうして

初心の耳にも感じ句中に古事古語詩歌などを少し
たくくるをよしとするは人の思ひさしの事
待ちかねて耳目をおどろかさんとするハ下る也
もとも事なり浅き歎こそ俳諧ハたてといへるとく
深き思ひし此人の世めるとく古人詩歌古事の善き
和歌をふる事にも奇ゝ句をさ是よふと川乃
心あるを詞を出来んとまる心をも耳目ハ詞を
こゝにも多くの句をよく思ひこらすれバよしとす

はやりうたに句を皆古事古語の糟粕とされ
淀川の流句をいふ

旅ね心を何にしたとへん
あしひきて長きよりも飛なるをおもふ　宗祇

楚辞九歌曰悲莫悲兮生別離といへる語をとる
あしき句なりし初学の耳にも落さるべし

稲妻に乗るいのちもろき風

發句のさしめすは鈴鹿山　とも
ときは

西行法師世をいとひてしめて鈴鹿山を越けるに付
鈴鹿山うき世をよそにふり捨ていかになり行我身なるらん
かゝるたぐひ古人にいくらも有し是を淀川の
拙とはいふなり

乞食袋

登云は一深き俳諧をせん人は須て学文のいとまも
なくはたゞ今日のごとく飛花落葉に他人の吾ぞ思
天地の無量無辺のあまりとは須て川に捨入て無とし

其いうへ学文のかき人といゝかさゝしるなり古人の歌ニ
よろつ世にたえいなし
出羽ニ尾ニ及はく
涼しさを歌ニ得て詠かゝと
翠白黛ニしめく紫よいおける道の記ニ出つとけ
あふ事もなかりし今立し詠まるといへると
京の寺も其のえら雨くしんとてたちぬとみとなくす
関東思ひ出て草くと云るよの本を詠まるといふ

大川霧ニ何くあしかすなくて舟の中
能狸あら川ニ猿の初声に舟の中にまたくて何かし
おもろ官を家録の揖枕たふをこゝにや速舩の
せきよ流しゝまちわたるとてとあるも
五位ハ位をこゝにも文に書とも見
源氏物語桐壺に中宮よこしもえしぬ三位の位こそ文字
むかしハいつて以なへしとあり
荒海れいう秋ゟ射ゟこそ那れきこし

帰来る夜の名さへあまあつる海のいかれるいを於
もろしかららの名けしまりししまみ智

　冬の月は卯波卑かやかしま哉

けふしふてに卯月の大波を卯波といひ五月もん
大波をさなこといふこそ是皆色合俤なるなるなり

逆茂木

登云比一條八座よる乃とも時切者物心を守く
よくよまる秀逸させんと心掛まちまちいふ心なく

兵の戦場にのそく城際に責寄たらんに逆茂木を
引のけく跡あとはたちまち安く乗入をあらんや
勇智ある武士といへしたとへ一番鑓をなしとも
一ヒ此なるをとりつきも屑つら軍の掟にもそむきたる人の
ためにはあまりつへる忠信とはいはれとかや俳諧乃
附句もかくのことく一分の手柄を径しいく前後の
ところをきれを詠より続く秀逸なくして
一巻をいひちあるん十人の連衆をもして百韻

奥ハ十八句のたゝみ也百韻ならバ百韻又一句を
仕立つることあらバ是ハ附句と逃句の分なくし
蕉門の附句ハ只むつかしくしてこそよしとて人情
二句つゞけて三句めハ字附の節を捨て心附なく
逃句の道ハ是を聴病の武士也連歌ニ近づく家
似よりあり連俳とも附句とも云ど逃句とハ云ハず
逃句ハたゞ附句のはまりて引かぬ所をするの附
ものなきを引で逃つけるに逃ありしも前を考て也

功者の入るる所ハ先此外の儒書なり歌仙ハ二三ヶ所
百韻ハ十所ほど成べし逃しハ山姥の謡ハ色即
是空なる所ハ佛法あれバ世法あり煩悩あれバ
菩提あり仏あれバ衆生あり衆生あれバ山姥ありと
はなしして柳ハ緑花ハ紅のいろいろといい
逃句の妙ハ逃るさまなき所にあり又句出来かねなバこそ
一体の修行にて是附るや附ぬ所を附るハつよ
逃句ハ数くあるものなり瓢集に

多かくたとへむちうちしさへなきさ
羅ヲし留をいとくくし法かくち
然(?)せくしふとなき給ひたり
しま弓行の弊なりかるしたる
酒て亢られて意あらしん
羽ふ八の間を乃そく衛く第て了
かくるくこ亘いふまとある中ても
はやき同しけく如雨くさるを今時の作者の其法ハいまた附句の論大あり滴し

なりまりし浮る縁ハいふとも いかし古人の骨肉を
探りけりていかてか味あさつらんや近比の物をいかく
多くしてその句ハ周りうし立病のまよいとも いそん
ミ人の気もなき人を羅るゆをいよとうし及なきさ人やと
附るゆりさ此にこそ法りうちとる句作して自他分明なれ
次に法りうちとつまり花山上皇の御風情とも天なりて
然れそふるなと泣かハんかるまかしおほしく 他る本条
翔関るハ定附まして文をかえ送り酒て亢ることかと

聞守ハうへまてわこし安まなし及まにハ句あれ此句くハし

基きく翁のまた道をまなへし付合ハ大概こゝろにて

して句あり此説る人を定ハ落る

と付ありかくして付道ハ行のことく上手の気に

立く逢茂木を取のける時ハ五句も七句も付へき

雲雀の巣

登云付ハ巣ハ君ニ六もとを勢ひ雀ハ芝生

巣をかゝへ見鏡虚空にあそんとも地の陰を

かくれ俳諧も又かくのことし花実に對すれハ

世にれをやる小唄の命し句の心ハ雲雀の声あり

遊ひかきとく花ハ花なくし実ハ巣をさかすなる

まくく底意まもなく本情をふくむへしとや

峯入やまた記外樂節もあり

名ある称えよいの大将儀の芋太郎

見むかし宗因の風あり詞ハなくもふかくおかし

見ぬと実をうたれハ大河く子巣に行のよう

みつからに終まるその道の地に落ん事を芭蕉翁
深くなげきて慈鎮西行のさびを探りそめらく
俳諧に花実相對のまことをおほし給ひぬれは
今都鄙の好士此事をまもるべし
虚実は花実の餘りハ七分実
実ありし人をやはらぐる用ある家
何しる平家の士熊七分実實清とこそしるせ
花実是をもに對せしむ七分実くあれる七くとも

うちかけに雲折く人を休るとハ詞も虚にしてまづ
内に存月を賞せる花実をもとめしたる尤不易的
姿といふべし其中にも冬の日猿蓑ハ実がち
なりとぞ又元禄七とせに炭俵を撰ハ意
ありしそのままに此集ハ花実相對して末世俳諧の
よるべきと先師嵐雪周竹に摘給ひしとぞ了

あい齋

登云此一條ハ多く齋を擬に其帯にせ遂留え

慢く余りむなしく放埒なること千句万句の席
みたし句数を人にほこらしめて上手の業とする
句前も無く会合もる付こゝろよき句をする人もあ
懐紙も満つれハ却てあやまりあまた残
達人のうけ留て附るも逸物の鷹のそれし第の
藝能くやけて嬉しさ其謂ハ只なをさまのよ心を
こめハ大あり滞りなく執筆のつらしき不あらく
宗匠し附句も発句も能き前句に向ひて団ハ

ごとし前句のとらひ一句の風情を心にこめらく
つくるへしたとへ句作に云おほせたりとも偶中にて
よきもあしきも連歌ハおとろへしまりて下るの手遠
又よりハ一座の功者に争て句を並して許を
先きよしその通ひより外く練功して猶せん事し
かゝる気絶ある作者の上をはしらせて等さへぎる此
其角も楓子も今に残し嵐雪も氷花百里ヶ
評をもちて被り居ハいふにも足れるものとて

里の道

登云此一條ハ京ちらおとうとせんきう人里くよ
東事をきり見ハ下ともをうとかくし先さるさ
名所或ハ神社佛閣肝要の所をみてよくしり下さ
都へ行をよし其他経の執行も左のとく数々あ
てし偽りもいさよ絶いなよ弟三はいかりしめ
枝葉よ見をとらるんおかさ路ある古人の句有
的をうつむさ不案く業をたとむへし 業あ

出ぬる口受傳法されとこともを執行あるへし
わかあらし胸指人志願とても常毎よ字訓耳あ里
終よ切紙の名をとる事之彼説経者の写本あるも
早寺ある学て終よ仏道を明らめさるためし
業の蔵の執行者よはよき教示を弟子ハ之能を
なり其仰しをはかるよ通ずるへし

錦綴

登云此一條ハ今も常よある事むかし秀句をとらんと

わすれ飛鳥ハ是二ツにわかれ漸して此ころ紙にも
ところ〳〵句をも同じかて佛うらん八人の為にまた
いろは文沈れ来るやうにわかれして飽まるに故
俳諧にようき句を作す只一筆に錦の中より經を
交へとやし席被ゑのことは大むね料理乃
破其辛苦をとし甚けくをとめし其元を陳の
發句しくや句は雅に切字の事はふをもし
経波の宗因武江に下向の法道て此送る人ともに

ここに蓮金一つとく寄の下に旅店すく野る屯
清案の千句あり其中何と申しはれ其句より
梶原の遥樽の道理弱しことは傍目出るあり
こうは梅翁風在中より伊勢付の道る元和を
三句めみとはいふ寄り宗因中にも各々とよきの
作り日本て秀逸を作り弱わふ家とかくる発句なし
まるれたまふ名とぞにみえ乍で大事の歌成そと
挽まるまぐ句なく往つしとふて連中にもち

いかなる附句をもいはるゝ事を申し出さるゝ
人々よりいさゝか止ることもなり付句満座あるまる
やうなる句をさへ少しといかにも作る人にもあたりにれ文
はなはだしてもなくてよこひて句体繁しくなりとかや
常に心へある事にて今の世も彼よりも乃所にて其座
よりし前句を読みてこの句の出来るいかなるも他にうつし八
を選ぶに後々の門弟等は我と何とかや座中に異
世の門人等をも俳諧の人々中よき句に縁こいへるし

はなはだしきを風雅にあそぶ人といふなり

西施

登云此一條西施捧心とて病ありて胸を押へ眉をひそめ
たるあはれもいとゞうつくし隣家の醜女これをまね
真似しけるを荘子寓言として是を初心に
たとへていふにして名人の句を贋せんとするは名人へあつらへ
掛けみたるを句にさして見るを醜女なるし
初心の人是を学ぶ事は皮肉を離れてあはれかいふ也

ちかくを失ふ初心の琢磨したるをよしといひよまの
場を打越ることを名人といふ名人といふハ達者なるひ
ある時柳てる人と初心とハ近し其謂ハ上手なる時
まそふかしして初心の及ぬ所ありて名人ハ句語
飾を捨ておのつからの風姿にあそふ有を初心の学
よるに此場ハ力とし句名人の句ハやすくと安ける也ハ
及んとして彼醜女の眉をひそめるにたとへるなる
ことに此三句を引て見る也

うくひすハ長刀にのる花りか
鶯の声とるまかくれまてさまくかしこけまるまて
牛若丸もひつふ風姿をうしなひけりりしも
まをつくしけり見を波间の葉もいかれ初心ハ
此地位よりと学入てし
鶯や藪鷹よりくる小長刀
鶯此の縁らしけ細径を太長刀てさめときしるや
よくくるうをみて此句のをかしさを小長刀ことふ

詞にかゝはらす場のあしらひなとにて此姿之事差別乃

一体を案し趣向をたてゝ姿を専とあらし

旅風や覚束なく来るなり

敍野の姿を留めんかたなくあらはす来る事あらす来るへからす

句作をなるたけてしるしたる上にて此場なる事

あかくと日ハつれなくも秋の風

是名人の場也以て其妙見て探題ハ会をと

打のてることくありくれ秋の風をたて一情り

云すして余情を従をもつて論へきとき

古瀬の新水

登云此一条ハ行きの風ハ後をもして其もとより秋

水をあつれ句を不けりとして詞古く心をあたらしく

葉をもしとまてにとゝ郭公の聲を見をつしと仕

悲哉の人情なる哉

夕ぐれはめつしほれて淀む寺

川もつる此もちこそなれ

河ハ古き事なれとも河も初なれハ尤よし
あらしこそまた其人なとして感動なさしむ
き此を初音此僧正ハ今の世まても此伝るハ三井寺
永縁僧正の事にて伝る又其寺の其名に残る
なにしき寺ちなとよして八初音ハ
十日より十の月蕎や頃しお寺
なるいつる句の事し古へ伝ひ来し浮世の僧正の
糟粕をなめて宗匠まなしかる俳の手てうるふを

大津の尚白
是ハ又わまる其井此かしお寺
これ俳諧の手振よして清哥の形を躍いて
あるへしとなし
堀橋
登云此一噂ハ橋まて溝堀を思案よしてみえて
死をあとの玉はよるを死ぬといひ伝る本もあり
なにハ俳諧の附句も初心の人此上なき事なるへしと

禅をうるハ句作を思ひ出れるハ無しよろしたく
論也く思ふ附子附をんまし一其切つありくて
強よ上そ此場つもありし
ごしくや様よこさせらる様の為

翁は常且を仕損しかご乃原に諍ひのふ
咋のしへまし仕損しみしや翁云毎すて仕損して
何のかゝる事のあらんと背かるゝ事なる也や
は何を志とありとして道よ入へし又楠正成のふ

年廿四五の若武者よく嵩よ付る軍共ハ先て好
大勝病の士ごゝゐるも此るもいよいよ若よ汝ハ精武者
とつれて敵中よかゝる此率をあつて狙の手よりの
人りて功つかりてりて手よもあり討ありて川をまたつて此
大ねよもいまうき老後ことやさ多しとう

昭和九年春
荻野清学兄より
受く、

迢空